Akita University

ヨーロッパ史卒業研究指導の方法と実践†
～「卒業研究指導ゼミ」と「卒業研究ゼミ」を通して～

斎藤　泰*
秋田大学教育文化学部

小論の目的は，大学生活の総決算ともいうべき卒業研究の指導について，その方法と実践を具体的に報告しながら，大学教育における卒業研究の重要性を提唱したものである．国際言語文化課程では，卒業研究に必要な科目として，「卒業研究指導ゼミ」と「卒業研究ゼミ」を開設することによって，効果的な指導を行うことになった．ヨーロッパ史の分野では，さらに「ヨーロッパ史演習」も開設し，2年間にわたる卒業研究の入念な指導体制を始めた．特に4年次の「卒業研究ゼミ」では，卒業研究の完成を目指して，長期的な取り組みを実施している．まず，レジュメ付きの報告と討論を重ねて，卒業研究の地道な準備を進め，次に，添削指導ゼミを通して，卒業研究の作成と完成のための懇切丁寧な指導を続けている．今や，「学部教育」の改善の一環として，こうした卒業研究の実質的な指導体制が求めらているのではないか，と結論づける．

キーワード：卒業研究，ヨーロッパ史，卒業研究ゼミ，学部教育の向上

Ⅰ．はじめに

本学学部が，「教育学部」から「教育文化学部」へ学部改組になってから5年目になり，2回目の卒業生を，本年3月送り出す．新たにスタートした国際言語文化課程では，国際化時代に相応しい専門科目や学際的な科目が数多く開設されたのが特色であるが，大学生活の総決算である卒業研究（以下，「卒業論文」を指す）の指導体制がより一層整えられたのも，注目すべき特色であろう．すなわち，3年次後期の「卒業研究指導ゼミ」（2単位）と，4年次学生に履修を義務づけている「卒業研究ゼミ」（4単位）がそれである．3年次後期からゼミ形式で始まり，4年次，年間を通して，しっかりと卒業研究の指導に当たれば，これ程望ましいことはない．何らかの形で改組・改革を進めている全国の諸大学のカリキュラムを見ても，あまり見あたらない本学部のユニークな体制ではないだろうか．もっとも，卒業研究6単位を加えると，卒業研究のための単位数12となり，多すぎないか，という意見もある．しかしながら，在学中の後半，最低1年半に亘る指導体制をとって，学生が地道に卒業研究が完成するように指導することが肝心であろう．

昨今，「学部教育の向上」(Faculty Development)が指摘され，諸大学で，様々なワークショップが開催されている．その中で，卒業研究指導の方法や実践がいかに議論されているか，寡聞にして知らないが，本来，講義，演習と並んで，あるいはそれら以上に，大学教育において卒業研究がますます大きいな比重を占めるのは言うまでもない．そのためには，教養教育科目，専門教育科目を幅広く，かつ少しでも体系的に履修する機会を与え，学生の関心を引き出しながら，卒業研究に集約出来るよう，長期にわたって，きめ細やかに指導することが不可欠である．かつて見られたように，シラバス上の建前に終わったり，なかんずく自主性のもとに，学生に任せ切りにするのは，放任以外の何ものでもなく，今や許されない．「学部教育」の改善を声高に謳う限り，教

2003年1月22日受理
† Supervision of Students Writing a Senior Thesis on European History
—Focusing on the "Seminar on Senior Thesis Guidance" and the "Seminar on the Production of Senior Thesis"—
* Yasushi SAITO, Faculty of Education and Human Studies, Akita University, Akita

Akita University

師自ら，1年あるいは1年半に及ぶ，稔りある，しかも綿密な卒業研究の指導がなされてしかるべきであろう．

私は，すでに旧教育学部時代から，4年次の「西洋史演習」で，卒業論文の指導を実施してきた．しかし，4年次では，どうしても就職活動のことを考量せざるを得ず，前期は隔週の個別ゼミに止め，後期に入って，初めて毎週のゼミを個別に行い，卒論の準備作業に着実に取りかかるように指導した．これでもかなりまとまった成果が上がったが，やはり3年次からの準備不足は否めない．しかも，効率よく進めるために，4年次当初から個別演習の入るから，同じゼミ生のチームワークがあまりなく，何よりも相互に意見を交わす機会がなかった．学年を下げるのと，ゼミ生全員でのゼミが望ましい，といつも思っていた．

それが，改組で，「卒業研究指導ゼミ」を3年次後期に新たに開設することによって，長年の願望が適えた．だが，私としては，さらに半年早めて，3年次前期に「ヨーロッパ史演習」（2単位）を設け，3年次初めから，ヨーロッパ史またはヨーロッパ文化史に関するテーマをゼミ形式で討論し合えるようにした．こうして，「ヨーロッパ史演習」から「卒業研究指導ゼミ」を経て，「卒業研究ゼミ」へと段階的に関連づけて，しかも，2年間に亘って，じっくりと指導出来るようになった．3年次の演習とゼミで，学生が自己の関心を自由に選び，あるいは何度かテーマを変更することも出来たのと，何よりメリットなのは，3年次のうちから，他の学生の報告を聞き，様々な意見や感想を述べ，自由に討論する機会が生まれたことである．そこから自ずとゼミ生のチームワークも生まれた．これは互いを知る好機でもあり，願ってもないことである．

もちろん，少なからず問題点を残しているのが現状だが，旧教育学部時代も振り返りながら，以下，これまでの卒業研究指導の拙い実践例を報告しよう．「学部教育」の改善の一環としても，卒業研究指導の方法と実践の報告が各方面から，様々の形で提示されてしかるべきであろう．小稿がその1つの事例になれば，幸いである．

Ⅱ．卒業研究指導の方法

旧教育学部では，講義，講読と演習という定型で，専門教育を行うのが，一般的であった．この内，演習が，本来の卒論演習になるか，講読と同じように文献講読になるか，は分野で様々であった．私の担当するヨーロッパ史では，常に卒業論文を重視するという教育方針で，演習を2つに分け，文献講読としての演習を自由選択にし，ヨーロッパ史で論文を書く4年次学生に限って，卒論演習を別に必修として義務づけた．それは，学生の就職活動のことを考えて，前期は隔週か，3週ごとに個別ゼミを行い，後期に入って，毎週のゼミで本腰を入れて卒論の準備作業に着実に取りかかるように指導した．そして，12月から1月の卒論提出まで，これまた個別の草稿添削ゼミを行った．そして，清書の後，1月下旬の提出で，演習は終了する．

ただ，これでは3年次向けの対応は明らかに十分でない．それでも，卒論演習に先立ち，3年次の後期から，学生が抱く問題関心を何度か聞く機会を設け，学年末までに仮題と構想を作成させように強引に持っていった．そして，「これからの卒業論文のために」として，『西洋史』（研究室論集）に掲載した．しかし，演習の開設でないので，定期的に実施出来なかったのと，何よりも同じ分野の関心をもつ学生が相互に意見の交換や議論する機会はなく，数回，個別で検討したに過ぎない．

1998年4月スタートした「教育文化学部」への改組では，ヨーロッパ史部門は，社会教科から，国際言語文化課程欧米文化選修に移行した．改組は，多様な科目の開設による選択の幅を大きくすると同時に，外国語教育の改善と卒業研究指導の充実化が計られた．その方針に沿って，ヨーロッパ史の分野では，まず「ヨーロッパ文化史」（「ブリテン文化史入門」）と「ヨーロッパ史Ⅰ」（「スイス連邦の成立と発展」）を講義とし，近代史・現代史は集中講義で補うことにした．さらに，国際化，異文化理解のためには，外国語文献の講読が不可欠である，という考えから，「ヨーロッパ史文献講読」を6種類も増設し，英語はもちろん，フランス語とドイツ語による原書講読の機会を大幅に設けた．しかも，専門科目は2年次からの自由選択であるが，特に文献講読は次年度も継続して履修し，単位取得できるよう，「読も替え」等の措置で柔軟に対応している．

卒業研究に入る前の科目としては，こうした講義と文献講読の外に，教養教育科目に「ヨーロッパ史」（「スイス学のススメ」）と「イギリス史文献講読」を開設したが，原則として，卒業研究の前提となる

Akita University

科目とは位置づけていない．履修に越したことはないが，何ら縛る科目ではない．私としては，講義，文献講読そしてゼミという順序で教育体系を立てたが，幅広く，かつ自由に学ぶ機会を与える，という原則の下に，卒業研究以外の科目には何ら縛りを付けないようにしている．

このように，専門科目を段階的に組み立て，同時に過年度に亘って履修するように工夫したが，これで学生を縛る意図はない．ヨーロッパ史関連科目を履修するのは望ましいが，全く強制はしない．それでも，文献講読の履修は，可能な限り学生に勧めている．英語もそうだが，フランス語やドイツ語で歴史書に接する機会はあまりない．何もヨーロッパ史の卒業研究を考えていなくても，大学でしか得られない好機を逃さないよう，ドイツ語，フランス語に少しでも興味を持つ学生には，その国の歴史を，その国の言語で読み解く，またとない機会だ，とアピールする．しかも，半年や1年では短いので，3年次や4年次になっても，継続して履修するように，やや強引に働き掛ける．実際，3，4年次生には，フランス語かドイツ語の歴史書を読む能力をかなり身につけた学生もいるし，中には，ドイツ語とフランス語両方の文献講読を履修して，読解力を養っている学生も数人いる．

3，4年次になっても，たゆまず文献講読を履修する学生が，そのままヨーロッパ史で卒業研究を書くことになるのは，自然の流れであるが，外国語による文献講読と並行して，出来るだけ早くから卒業研究への準備を考えていた．そこで，改組に当たって，3年次後期に「卒業研究指導ゼミ」を開設することには，全面的に賛成であった．これはいわゆるプレゼミであるが，同時に，私は，このプレゼミに先立つ演習の必要性を考えていた．そこで，「ヨーロッパ史演習」（2単位）を，半期だが，3年次前期に開設した．ただ，この演習は自由選択として，ヨーロッパ史の卒業研究に不可欠な科目にはしない．この演習の狙いは，少しでも関心のある学生が，自由にテーマを選び，その問題関心をいろいろ模索することである．報告者は，レジュメを自ら作成して，履修学生に配布し，報告すること，報告を聞いた学生はそのレジュメに基づいて質疑応答すること，こうした初歩的な発表の要領も身につける科目としても，この演習は役立つようにした．

幸い，「ヨーロッパ史演習」履修者のほとんどは，そのまま後期の「卒業研究指導ゼミ」に流れるので，テーマはだんだんと絞り込こまれるようになり，また，報告手順にも慣れ，ゼミ運営はとてもスムーズに進む．だから，4年次になっても，これを引き継ぐゼミが望ましい．それが，「卒業研究ゼミ」に他ならない．ややもすると，本来の演習が文献講読とか，演習・実習の名で現地視察や調査になりがちだが，そうならないように，卒業研究の名を銘打ったゼミを開設することは，当然のことながら，卒業研究の重要性から考えて極めて有益である．しかも，4年次，1年間通して行うことは，大学教育に占める卒業研究の役割から，当然のことと言えよう．そして，その方法は多様であっても，「卒業研究ゼミ」の実施は，学生の卒業研究に直接に役立つものとして行われるべきである．その進め方は，「卒業研究指導の実践」として，次の章で具体的に述べることにして，3年目を迎えた卒業研究の準備段階として，3年次のゼミの改善点を，ここで述べておきたい．

先述のように，3年次前期に，「ヨーロッパ史演習」がスタートする．自由選択で，誰でも履修出来るようになっているが，前もって，すでに2年次学生に，「ヨーロッパ文化史」や「ヨーロッパ史Ⅰ」の講義，または「ヨーロッパ史文献講読」を通して，可能な限りヨーロッパ史や文化史に興味を抱いている学生を積極的に勧誘しておく．ここ3年間で，4名，9名そして11名の履修学生で，ゼミ人数としてほぼ手頃だ．オリエンテーションから2回目まで，演習の進め方を説明した後，学生の問題関心の調査を数回繰り返す．こうして確認出来たテーマを一覧にし，報告のローテーションを決め，次回からいよいよ報告に入る．1回のゼミで，2人が報告し，それぞれ2人の質問者を順番に指定する．報告20分，質疑応答10分で，必ずレジュメ作成を義務づける．

報告に先立ち，必ず事前に学生と個別に打ち合わせをする．選んだテーマに関する相談には積極的に応じ，文献も紹介するし，率先して学生に貸し出す．また，レジュメの作成も図表を盛り込んだ分かり易いものになるように指導し，両面コピーの印刷を研究室コピーカードで行わせる．毎回，こうした細かいアドバイスを与えながら，内容はもちろん，報告の仕方も自然に修得させるように指導する．

準備や報告の手順がそれなりに慣れてきた頃，「卒業研究指導ゼミ」が3年次後期に始まる．このゼミから，4年次の卒業研究指導教師が決まる．演

Akita University

習履修者全員がそのままゼミに流れる訳ではないが，既習者は必ず入っているので，ゼミの要領を改めて説明する手間が省ける．この3年間で，指導ゼミの参加者は，3名，9名そして6名である．3年目を迎えた，本年度の指導ゼミで目立ったのは，予想外に盛況だった，ということだ．何より履修者全員がこれまで以上に報告に興味を示し始めた．たぶん，演習とは異なり，毎回の報告を1人に絞り，時間に追われないで，じっくりと報告出来るようになったのと，6名という人数が幸いして，必ず質問するのを全員に義務づけたことによるのであろう．工夫を凝らしたレジュメに惹かれるだけでなく，報告に全員が揃って耳を傾けるようになった．もちろん，報告には，常に私もかなり細部に亘って質問責めを怠らないが，感想でも意見でも，自由に発言するよう全員に促すと，的を得た適切な質問や鋭い問題点が出くるから，おもしろい．教師である私の方が感心する時もある．ゼミの進め方としては，今年度の指導ゼミは，予想外に成功した，と内心ほっとしている．これまでの3年間の試行錯誤から生まれた改善点といってよい．これが，必ずや，いろんな形で4年次の卒業研究に結実するのはまず間違いない．

Ⅲ．卒業研究指導の実践

卒業研究指導の実践については，「『卒業研究ゼミ』の実践」と，「卒業研究の具体的な指導」に分けて，述べることにする．その前に，過去15年間，私が直接指導してきた卒業論文・卒業研究について，概観しておこう．

私が本学に赴任した1988年度から今年度まで，全部で69の論文を指導した．このうち，教育学部社会科西洋史の卒業論文は59で，残り10は，教育文化学部国際言語文化課程欧米文化選修としての卒業研究である．平均して，毎年4名となり，1人の教師が指導する卒業研究の人数としては，ほぼ理想的といってよい．その年度別の題目一覧は，**表3**の通りである．各年度の題目から明らかなように，古代から現代まで，実に多岐に亘っている．原則として，すでに扱ったテーマを取り上げないように指導して来たので，内容が重複する題目は全くない．

テーマの確定に当たっては，前章で述べた3年次の演習とゼミで，まず学生が様々な関心を持って，自由にテーマを選択するように促す．学生の関心が優先するとはいえ，学生に任せきりではいけないし，といって，教師の押しつけでもいけない．テーマ確定は，卒業研究指導の最初の要なので，細心の注意を払う．学生の多様な興味を引き出しながら，同時に，出来るだけ新しいヨーロッパ史や文化史の研究動向を反映するように指導する．こうした動向については，学生が十分に熟知してないのが普通なので，私の方からそうした新しい視点や，注目されている傾向を示し，ヒントを与える．そして，数回に亘る学生との意見交換を経て，テーマ決定となる．学生が抱く素朴な問題関心と新しい傾向がどの程度折り合うか，が卒業研究指導の難しいところである．

こうしたテーマ確定の努力の効果が，**表3**の題目一覧に鮮明に現れているであろう．各題目名それ自体がその証拠である．全く決まり切った題目になっていない．題目やサブタイトルの斬新なネーミングに，新しい傾向が盛り込まれているよう工夫を凝らしているが，何よりも学生と教師のせめぎ合いの成果なのである．

時代別に分けたのが，**表1**である．ほぼ全時代に及ぶが，中世から近代に集中しているのは，学生の自然な感情であろうし，奇しくも歴史学界の姿を再現しているかもしれない．たぶん，文献検索や入手にもよるのであろう．それは，次の**表2**の，取り上げた対象の国別分布にも表れている．イギリス，フランス，ドイツそしてアメリカが多いのは，このことを裏付けている．私としては，こうした大国だけでなく，ベネルクスやスイスといった小国，北欧や南欧諸国へも関心を向けさせるが，少し興味を抱いても，先行研究の不足から，どうしても消極的にならざるを得ないようである．

同様に，東欧諸国も少ない．実は，東欧については，「東西冷戦」以前に遡って，歴史に限定せず，文学，政治，経済や民俗的視点を織り交ぜた学際的研究が出来るのと，長い間，我が国の学界では未踏の分野であるから，面白い卒業論文になるし，何よりパイオニア的研究が出来る，とかなり誇張して学

表1　時代別題目数

時代	題目数
古代	4
中世	18
近世	15
近代	21
現代	11

Akita University

表2　国別題目数

国	題目数
イギリス	13
フランス	10
ドイツ	9
アメリカ	5
イタリア	3
オーストリア	3
ロシア（旧ソ連）	3
アイルランド	2
オランダ	2
スイス	2
ポーランド	2
ベルギー	1
スペイン	1
ハンガリー	1
ルーマニア	1
トルコ	1
エジプト	1
イスラエル	1
イラン	1
オーストラリア	1
カナダ	1
その他	5

生に吹聴するが，これまた乗ってこない．文献が揃わないのが決定的なのであろうが，それより，たぶん，教師が率先してその範を垂れねば，と内心自省している．

さらに，EUの最新の動きから，国に超えた，いわゆる「ユーロリージョン」的視点が注目されているが，アルザスやオランダの題目は，そうした傾向の表れといえよう．

私の講義や文献講読では，「国家と宗教の相互関係」と「歴史と文学の交錯」を，ヨーロッパ史や文化史を読み解く重要な論点として繰り返し強調して来ている．十字軍やアルビジョア十字軍から12世紀イングランドの王権と教会，イギリス国教会やネーデルランドの反乱，そして，フランス革命の「最高存在」といったテーマは，こうした事例である．ロビン・フッド論や中世ウェールズ論は，サブタイトルの通り，「歴史と文学の交錯」であり，アーサー王もその一例である．『レ・ミゼラブル』を手掛かりに「民衆蜂起とカーニヴァル」を論じたのも，その好例だが，これは，最新の社会史研究が背景となっている．社会史や国制史の影響を受けながら，民衆意識，社会・国家意識や，宮廷と国王の儀礼，帝国クライスあるいは民衆学校とギムナジウムの関係などのテーマが選定されることにもなった．

こうした新しい歴史学の潮流をある程度先取りしている，と言えるのが，昨年度のローマ時代の「社会基盤」の整備や，今年度の「宗教改革における都市と農村」，「バイエルン地方の地域巡礼」であろう．いずれも斬新なテーマだが，「ナショナル・トラスト」の国民統合としての役割や，「オランダ的特質」（ワークシェアリングはその1つ）となると，今現在，学界や世間で話題になっている問題が，十分に卒業研究の対象になり得ることを表している．

なお，技術的なことだが，表題のネーミングには，特に簡潔かつ目新しさを求めている．1冊の本を作る気概で取り組むのが，卒業研究なのだから，表題もそうした読者の目を引くネーミングが望ましい，と常に学生に促す．だから，「……の考察」とか，「……について」といった月並みな表題や，長ったらしいのは避ける．かなり工夫された表題であるのが，これまた**表3**の題目一覧から明らかではないだあろうか．

(1)「卒業研究ゼミ」の実践

このゼミは，昨年度の4年次からスタートしたが，その進め方は，それまで長年，卒業論文のために開講してきた「西洋史演習」と全く同じである．私としては，先述のように，すでに3年次末に，「卒業研究指導ゼミ」で題目を確定し，構想を提出させているので，4年次早々の卒業研究の指導には入りやすい．シラバスには，「ヨーロッパの古代から現代までの中から，テーマを設定して，レジュメ作成の上，報告し，議論する．その積み上げで，卒業研究を完成する」と「授業の目標」に謳ている．「授業の進め方」は，「レジュメに基づいて，徹底的に議論する」仕方で行うこととし，シラバスの「メッセージ」に，「最新のヨーロッパ史の研究成果を的確に継承しながら，論文を完成する」という留意点を明記することも忘れない．そして，口頭で，1年間に亘る長丁場の課題が卒業研究なのである，という心構えを諭す．

通年で，4単位を認定する「卒業研究ゼミ」は，大きく3つに分けて実施される．先ず，夏休みまでの前期では，週3人のローテーションで，個別ゼミを行う．日時は，毎回学生との打ち合わせで決める．1年間全体でいえることだが，無断欠席は許さない

Akita University

し，時間厳守は当然である．止むを得ない事情で日時変更の際には，必ず事前に連絡することを義務づける．これには，学生とのメール交換がとても便利だ．「ゼミ連絡」の件名で，出欠だけでなく，卒業研究の進捗状況などでも頻繁にメールを交わす．

ゼミは，学生が作成したレジュメに基づいて行われる．必ず1部をコピーさせ，それを見ながら，学生の報告を聞く．1度に報告されると，論点が拡散するので，2，3に区切って報告させ，それぞれ事実関係の確認から始まって，細部に亘る疑問を情け容赦なく投げかける．こうした議論を重ねることで，理解が深まり，論点がより明確になるのは言うまでもない．そして，次回取り上げる課題を聞き出して終わる．1人につき正味40分前後のゼミである．

夏休み明け前後からは，今度は，曜日と時間を固定して，毎週1回の個別ゼミに切り替える．その初回に，3年次のゼミからの全てのレジュメを揃えて，それを見ながら，卒業研究の骨格を作らせる．私の意向をかなり押しつけるようになるが，指導上止むを得ない．というのは，これまでの報告だけでは，学生はまだ漠然した輪郭しか浮かんでないようだ．それを軌道修正することによって，全体像が見えてくる．こうすると，夏休み以降の個別ゼミの中身が一段と濃くなり，学生の研究心をかき立てることになるのは間違いない．

こうして，およそ9月下旬から，レギュラーのゼミが本格化する．12月上旬まで，学生は毎週必ず研究室に来ることになる．もちろん，祝祭日や，会議で出来ない時には，必ず振り替える日を決め，週1回の報告義務を負わせる．レジュメも分量も厚く，中身の濃い報告となるのは，自然であろう．というのは，この時期になると，概説書や一般書ではなく，本格的な研究書や研究論文を読むようになるからである．難易に拘わらず，その問題提起と論旨および論点を的確に把握させ，それが卒業研究に直接役立つように指導する．こうした進め方を繰り返しながら，同時に，10月下旬から11月にかけて，編別構成を作らせる．学生の素案をたたき台に，議論を重ねて，その原案の完成に至る．編別構成は，表題と並んで，その論文の完成度に関わることなので，特に熟慮するように固く戒める．差し替えが数回に及ぶのが普通である．

編別構成が固まると，ゼミ報告は，その構成に沿って行われるようになる．つまり，章・節で，手薄な部分を重点的に埋め合わせる仕方で，報告を準備させる．丁度この時期，欧米文化選修全体の卒業研究中間報告会があるが，ゼミにはほとんど影響しない．3年次以来の着実な積み重ねた成果が，レジュメや発表それ自体にあっきりと現れてるので，私が指導している学生が頼もしく見えるから不思議だ．

12月上旬まで少なくとも15回を数えた「卒業研究ゼミ」は，いよいよ草稿添削ゼミに入る．本学の卒業研究の提出日は，1月31日なので，12月中旬から始めて，およそ1ヶ月半，草稿作成と清書の時期である．もちろん，これまでも卒業研究の指導であるが，これ以降は，卒業研究の完成のための具体的な指導となる．

(2) 卒業研究の具体的な指導

何度も強調して来ているように，卒業研究は，1年から2年に及ぶ長期の課題である．「ヨーロッパ史演習」から「卒業研究指導ゼミ」を経て，「卒業研究ゼミ」を履修して，継続して取り組んできた学生は，今や自ら原稿を書くことになる．もっとも，今日，誰でもパソコン入力で原稿を作るので，パソコンに打ち込むといった方がよいだろう．草稿では，パソコンに入力し，必ずデスクトップとフロッピー保存を義務づける．草稿を添削した後，修正したのをプリント・アウトしたのが，清書となる．

草稿の作成にあたっては，学生にいくつかの指示を与える．先ず，編別構成を見ながら，章・節ごとの予定枚数を聞き出す．ゼミ報告や自主的な勉強から，どのぐらいの分量を考えているか，編別構成に書き込ませる．1枚800字として，各章・節ごとに，およその枚数を書き込ませる．アンバランスな構成を避けるためである．私の方針としては，卒業研究の枚数には，特別に制限を設けていない．思う存分書くことが何よりも大事だ，といつも促している．目標は大きく，800字で150枚．最初，この枚数に戸惑いを感じるようだが，完成してみると，その前後になっているのに，学生自身驚いている．

「はじめに」(「序」) と，「おわりに」(「むすび」) に各7枚前後を割り当て，計14枚を引いた136枚を，章・節に割り振る．これは目安であり，あくまでも努力目標である．この後，「はじめに」に書くべき最小限のことを指示する．取り上げた素朴な動機や問題関心から，そのテーマの意義さらには先行研究や研究史あるいは最新の研究傾向・視点に言及することから始めて，論文の課題設定と方法視点を明確

Akita University

に打ち出す．そして，論述の手順を要領よくまとめてから，本論に入ることになる．

こうしたやや細かい指示を与えた後，ただ書き進ませるだけである．明快に分かり易く，論理が一貫した叙述スタイルを心掛けながら，節ごとに書く続ける．ただ，説明不足にならないように注意して，書くこと，余分なのは，私の方でいつでもそり落としてやるから，と言い含めて，草稿作成に取りかからせる．

学生の草稿を丹念に読み，添削するのは，煩わしいが，卒業研究の指導に残された最後の大事な仕事である．「卒業研究ゼミ」は，これまでのレジュメに基づく報告と質疑応答から，草稿提出と添削に移る．まず，「卒業研究添削日程表」を作り，学生が草稿を提出する日時を決めさせる．節ごとに提出させて，添削したのを持ち帰る時，次の草稿を持ってくる，という繰り返しである．ただし，添削後の草稿をそのまま持ち帰るのではなく，私が加筆修正した箇所を学生に確認させたり，疑問点や説明不足などを指摘する機会をその都度設ける．いつも数分で済むが，そうすることで，学生も私も納得出来るものが仕上がる訳だ．何もそれまでする必要があるか，と思われるが，独りよがりの文章にならないためにも，面倒でも目を通すのは欠かせない．投稿論文でいう査読ほどではないが，全員の草稿を満遍なく読み，論理的に明快になっているか，さらには句読点の打ち方までチェックする．これで，誤字や打ち間違い，さらには意味不明の個所も修正できるので，やはり添削は必要のようだ．

草稿添削は，週１回というよりは，学生の努力次第なので，週１回の時もあれば，２回になる時もある．学生が草稿を提出しないことには，始まらない．草稿提出と添削の繰り返しがおよそ１月25日の頃まで，休みなく続く．冬休み返上で，いつも12月30日まで学生は研究室に来るし，正月は４日から再開する．その間でも，添付ファイルかファクスで草稿を送信させる時もある．

１月下旬まで草稿添削ゼミが続き，およそ14，5回に及ぶ．添削の後，修正したのが，パソコンに保存されて，完成稿となる．もちろん，その文書管理は自己責任だ．草稿は，40字×40行の1,600字で構わないが，清書は，A4型の横書きで，40字×20行の書式に転換させる．この作業が清書だが，当然，図版，地図や統計表等が貼り付ける箇所を指定しながら，書式に転換しなければならない．図・表・写真を豊富に掲載するのが，論旨をより一層説得的にする，という理由で，可能な限り勧めている．だから，手順として，所定書式に転換し，プリント・アウトした後，貼り付けることになり，最後に，予想外に煩瑣な仕事が待ちかまえていることになる．頼もしいパソコンでも，仕上がるのに少なくとも３，４日はかかるだろう．

実は仕上がりに入る前に，もう２つ面倒なのがある．卒業研究は学術論文のスタイルを取るので，脚注を適宜挿入するのが不可欠だ．引用・参照文献，説明補充や関連事項，時には解釈や考えを「註」に書き加える．特に文献掲載の記述法，とりわけ「前掲書」や「前掲稿」扱いなども，こまめに指導する必要がある．かなり技術的だが，面倒なことには変わりはない．そして，巻末の「参考文献一覧」の掲載も忘れない．

もう１つは，口絵の選定である．これは面倒というより，楽しい方に入るかもしれない．そもそも卒業研究は「１冊の本」である，といつも学生に言っているので，口絵を貼り付けるように強く勧める．幸い，学生も好んで掲載するようになった．ただ，選定が難しいらしい．いわば卒業研究の「顔」になる，すばらしいカラー写真が望まれる．学生によっては，数枚貼り付けるとか，あるいは自らの海外旅行のスナップをちゃっかり貼り付けた卒業研究もある．

こうした一切の作業が完了して，出来上がりとなる．後は，製本して，提出するだけである．簡便な製本機があるので，何ら問題にならない．３年次の「ヨーロッパ史演習」と「卒業研究指導ゼミ」，それから４年次に１年間に亘る「卒業研究ゼミ」を経て，ここに大学生活の総決算である卒業研究が完成する．繰り返しになるが，実に長丁場の課題であって，しかも大学でしか経験できない貴重なものと言っていいだろう．

なお，こうした地道な努力の成果を活字に残す，という目的で，ヨーロッパ史分野では，毎年２月，『西洋史』（研究室論集）を編集，発行している．題目，目次付きで，およそ4,000字前後の概要を，「卒業研究の報告と展望」として掲載し，また，「卒業研究を終えて」で，率直な感想を自由に書かせている．今年で14号になる．これまた大学生活が残した貴重な財産といえよう．

Akita University

Ⅳ. 今後の課題

大学教育における卒業研究の重要性に鑑み，長年自ら実践して来た，ささやかな実例に基づいて，その指導の方法と実践を述べてきた．かなり些細な事柄まで言及した嫌いがあるが，今やますますきめ細かな指導が求められている，と考えて，敢えて詳述した．まだまだ試行錯誤の連続であり，もちろん，これからも一層改善していかなければならないのであるが，今後の課題として，さし当たり，次の3点を挙げておきたい．

まず第1に，ヨーロッパ史やヨーロッパ文化史に関する邦文文献の購入である．最近の研究は極めて多岐に亘っており，最新の研究書から一般書まで，夥しい数になる．検索にはそれほど苦労しないが，研究室予算が決定的に不足しているのが，何とも悩みの種だ．卒業研究に関係する書籍は，惜しみなく購入するようにしているが，予算の不足には勝てない．卒業研究という種目の特別予算が望めないものであろうか．

第2に，欧文文献を卒業研究にいかに有効に活用させるか，である．ヨーロッパ史である限り，外国文献を読まないことには始まらない，というのはもっともだ．「ヨーロッパ史文献講読」を複数開設しているのも，その目的の1つは，卒業研究のためである．だが，実際は，文献講読で身につけた語学力が，なかなか卒業研究のための文献講読に活かされていない．なぜなら，外国文献の選定と購入に手が回らない，というのが正直な理由だ．ここでも予算の問題が浮上するが，同時に，英語のみならず，ドイツ語，フランス語の書籍を揃えるのが，今後果たさなければならない課題である，と痛感している．

そして，第3に，最近の学生の関心がますます多様化しており，卒業研究のテーマも，明らかにヨーロッパ史から文化史，比較文化史や民俗学といった分野にも及んでいるので，これらにも積極的に対応せざるを得なくなってきたことである．この傾向は，欧米文化選修になって顕著であり，指導する教師の力量が問われる．卒業研究の指導においては，自分の専門にしがみつくことは許されない．**表3**の題目一覧から明らかなように，私は，自分の専門のヨーロッパ中世史やスイス史にこだわらず，全時代に亘って幅広く指導して来た．しかし，学生の関心はそれ以上にバラエティーに富んでおり，これからはそうした学生のニーズに応えねばならないであろう．

こうした課題を残しながらも，自ら実践して思うことは，今こそ卒業研究の実質を伴った指導それ自体が求められている，ということである．全く拙い実践例を述べてきたが，要は文字通りの指導を教師自ら率先して実践することである．いかに大学教育の見直しとか，「学部教育」の改善とか，を声高に唱えても，実のある教育を汗水垂らして，自ら行わない限り，絵に描いた餅にしかならず，また，それは何より大学教師の怠惰の誹りを免れないだろう．今や，自主性とか，学生の判断に委ねるとか，という大儀名文では済まされない．大学改革の中でも，今，目の前にいる4年次の学生が少しでも達成感を感じる卒業研究を完成することが出来るかどうか，は専ら教師の肩に掛かっている，と言ってよいであろう．

表3　卒業論文・卒業研究題目一覧（1988年度～2002年度）

1988年度
南北戦争の原因について
イラン立憲革命の研究―ウラマーを中心として―
1989年度
フリードリヒ大王の思想と現実
初期アイルランド民族運動の展開と意義
ネップ研究
1990年度
十字軍をめぐる中世人の意識と動向
アルビジョア十字軍
―中世ヨーロッパにおける宗教と政治―
ドイツ中世都市の成立と発展にみるミニステリアーレンの役割
百年戦争考
アメリカン・デモクラシーのかげに
―ジャクソン時代のインディアン政策―
伝統を担う人々
―19世紀イギリスにおけるジェントルマン―
ロシアにおける1905年革命の研究
ドイツ革命とは何か―ドイツ11月革命の研究―
ポーランド第2共和国研究
ヴァイマル共和国とその矛盾
1991年度
マリア＝テレジア論考―18世紀オーストリア研究―
ルーマニア民族の国家統―

Akita University

現代ハンガリーの「第3の道」

1992年度

東部属州における「3世紀の危機」
モーツァルトの時代
リンカーンの実像
19世紀社会と科学技術—Britain in the age of Steam—

1993年度

ナイルに生きる人々—古代エジプトと現代—
アーサー王伝説の研究
中世ドイツの都市と農村—中世考古学からのアプローチ—
レコンキスタのスペイン
ひとつのジャンヌ・ダルク像
独立革命前夜のアメリカ植民地
—マサチューセッツを中心として—
ナポレオン試論—その人物像と近代化への貢献—
オーストラリア多民族社会の形成と発展

1994年度

ゲルマンとラテンのはざまで—ベルギー史研究序説—
中世ウェールズ史論—歴史と文学の交錯—
「ネーデルランドの反乱」論
—16世紀オランダの宗教と政治—
スイス中立の起源とその発展
近世イングランドとアイルランド
—アルスター反乱を中心として—

1995年度

12世紀イングランドの王権と教会
ミケランジェロ—その時代と芸術
イングランド国教会とは何か
ポーランド人の民族意識の芽生え
—分割，蜂起と挫折の時代—
アメリカ新移民の夢と現実

1996年度

アルフレッド大王の世界
—アングロ・デーニッシュ体制研究試論—
ロビン・フッド考—歴史と伝説の交錯—
ヴェネツィアの盛衰
—13〜16世紀地中海世界を舞台として—
宗教，家族そして識字化—もうひとつのヨーロッパ近代—
都市サンクト・ペテルブルクの実像
ケベックに咲いた“白ゆり”
—北アメリカにおけるもう1つのフランス—

1997年度

表象としての最高存在

1998年度

ローマ時代のアフリカ社会
隔離された世界の中へ—ドイツ中世都市とユダヤ人—
18，9世紀イギリスの都市文化と民衆意識

1999年度

宮廷と国王の儀礼——つのフランス絶対王政論—
民衆学校とギムナジウム
—近代ドイツの国家と社会との関連において—
ラグビー・社会・国家意識—19世紀イギリスの一断面—

2000年度

アングロ・ノルマン—海峡を挟んでの統治
市壁から中世パリを探る
コンスタンティノープルからイスタンブルへ
民衆蜂起とカーニヴァル—『レ・ミゼラブル』を読む—
現代イェルサレム考

2001年度

古代ローマにおける「社会基盤」の整備
帝国クライスの国制的発展
—近世フランケン，シュヴァーベンを中心として—
アルザスとは何か—言語，教育そして国家—

2002年度

動物から妖怪へ—ひとつのヨーロッパ民俗学的試論—
宗教改革における都市と農村
—ドイツ語圏スイスを中心として—
近世バイエルン地方における地域巡礼
—もう1つの対抗宗教改革—
カフェ文化の世界—近代パリの社会と芸術—
ナショナル・トラストを読み解く—ブリテン史への試み—
「オランダ的特質」とは何か
オーストリアにおける「ナチ償い」の実相

参考文献

土井正興（1993）「外国史の卒業論文について」『歴史評論』第518号.

歴史科学協議会編（1998）『卒業論文を書く—テーマ設定と史料の扱い方』山川出版社.

斎藤　泰（1994）「考えること」『西洋史』第5号.

同（2002）「大学教育における『文献講読』の効用—ヨーロッパ史理解への試み—」『秋田大学教育文

Akita University

化学部教育実践研究紀要』第24号.
『西洋史』(1990-2003)(秋田大学西洋史研究室論集)第1～14号.
「斎藤研究室ホームページ」http://cube.ed.akita-u.ac.jp/staff/ysaito/index.html

Summary

The purpose of this paper is to report a method and practice of supervising students who are writing their senior thesis in the area of European History. In so doing, emphasis is placed on the importance of writing a senior thesis at the university level. Since implementation of a new curriculum at Akita University in 1998, senior students have been required to take two courses offered through the Course in European and American Cultural Studies in the Program of International Language and Cultural Studies (Faculty of Education and Human Studies). These courses are "Seminar on Senior Thesis Guidance" and "Seminar on the Production of Senior Thesis." Students majoring in European History are also required to take the course "Seminar on the History of Europe." In these threes courses in general, and in Seminar on the Production of Senior Thesis in particular, a focus is placed on helping students complete their senior thesis by having them report an abstract of their progress on a regular basis. Each student is provided with a set of constructive suggestions at each session. As well as providing further details on the courses, the paper concludes by proposing that this type of guidance comprise an important aspect in specialized field of study at undergraduate level education.

Key Words : Senior Thesis, European History, Seminar on Senior Thesis, Faculty Development

(Received January 22, 2003)